

1 私はことしの8月、観光的視察団に加わって、はじめてソ連を訪れた。ナホトカからレニングラードまで、広大なソ連を東から西へ横断したのであるが、それが2週間足らずの旅であった。

モスクワとレニングラードでは、ヨーロッパ的な都市美やツァー時代の壮麗な遺産に観光的満足を覚えたにすぎなかったが、旅の日程の過半数を費やしたシベリアでは、いささかソ連経済の社会主義的建設の実体の一端に触れたという感じをもつことができた。そこでは、出力世界一といわれるアンガラ発電所を中心にいま建設されつつあるシベリア開発の拠点ブラーックの規模の巨大さに目をみはったが、それと同時に、実際に目で見ることのできたソ連国民の消費生活の乏しさと、競争なき社会の非能率さとは、私にソ連の経済建設に関するひとつのイメージを与えてくれた。ソ連はなお“強制貯蓄”に基礎をおく国家武装に急であって、社会主義がおそらくその目標にしているであろう“福祉国家”の域にはまだかなり遠いということがそれであった。

2 ソ連のGNPは、周知のように、世界第2位である。過去十数年間における経済成長率は実質年平均6%で、日本および西独について世界第3位、労働生産性も1965年には日本のそれを越えているが、1人あたりの実質消費水準は、同じ年に、日本のそれをかなり下回っている。

ソ連経済のこのような高い成長率の推進力は、年々の巨額の固定投資であって、そのGNPにおいて占める割合は日本について世界第2位である。そのような巨額の資本形成の源泉は、ソ連の財政収支をながめることによって示唆される。

たとえば、1966年についてみると、財政規模は1,063億ルーブルで、収入の7割が取引税と企業利潤の引揚げとから成っている。取引税は、消費財の政府調達価格と販売価格との差であって393億ルーブル、企業利潤の引揚げは357億ルーブルで、直接税はわずかに84億ルーブルにすぎない。他方、支出の大部分を占めるのは、国民経済費452億ルーブルと社会文化費408億ルーブルで、それについて国防費が134億ルーブルとなっている。

このような数字は、資本蓄積が消費税という大衆課税に大きく依存していることを示しており、国民の実質消費水準がきわめて低い理由を語っている。

3 旅を通じて私の強く感じたことは、国民の生活態度が思ったより明るく、低い生活水準に甘んじているかにみえたことである。それに関連して、私は、ケインズが革命後まもない1925年にソ連を訪れて発表した小冊子『ロシア管見』のなかで、もしレーニン主義が成功するとしたら、経済的技術の改善としてではなく、宗教としてであろうと述べたあと、「共産主義が多数の人の心をとらえたのは、普通人の地位を高めるという教義であって、どんな宗教にせよ同じ宗教を信じる人びとを結びつけるきずなは、宗教をもたない人びとの利己主義的な孤立主義に対抗する力をもっている」と書いていたことを思い起こしていた。

またケインズは同じ書物で、「私は新しい暴君たちの行動を古い暴君たちのそれと同様に憎みたい。しかし、古いロシアの残忍性と愚劣さからは何ものも生まれることができなかったが、新しいロシアの残忍性と愚劣さの背後には、理想が何か一点潜んでいるように思われる」と書いている。いまソ連の一般国民は、その「理想の何か一点」に望みをかけているのであろうか。——それにしても、“組織”から生まれるものであるにせよ、ソ連国民の“非能率性”には反省の余地が多分にあるのではないだろうか。